

自殺への潜在的態度

IATを用いた病死・不慮の事故死との比較に基づく検討

白神 敬介*・川島 大輔**・川本 静香***・川野 健治****

(平成30年2月28日受付；平成30年4月24日受理)

要 旨

自殺に関する人々の認識は自殺予防の推進に関わるものである。しかし、自殺といった「死」に関連する問題を、研究・調査において取り扱う際には、回答におけるバイアスが生じやすく、実態を反映したデータが収集しにくい。ゆえに、死や自殺に関する人々の認識の実態を把握するためには、適切な測定方法を用いる必要がある。本研究では、自殺に関する考えの実態を把握し、今後の自殺対策活動に活かしていくことを目的として、IAT (Implicit Association Test) を用い、潜在的な態度も含めた自殺への認識について検討を行った。大学生・大学院生44名を対象として、IATならびに質問紙調査を行い、自殺に関する潜在的指標と顕在的指標を調査した。結果、質問紙調査によって顕在的評価を行った場合は、大多数の調査対象者が自殺に対して「悪い」イメージを報告したが、IATによる潜在的評価においては自殺を「良い」と評価する対象者が一定数存在することが示された。また、潜在的評価においては、一般的な意味での「良い」という評価と、美学的な側面に焦点をあてた「良い」という評価とで異なる評価をする対象者がみられた。

KEY WORDS

suicide prevention 自殺予防 image of suicide 自殺へのイメージ implicit attitudes 潜在的態度
stigma ステイグマ

1 問題と目的

日本において自殺（自死）は大きな社会問題である。厚生労働省の『自殺対策白書』によると、日本は主要国のなかではロシアに次いで高い自殺率がみられる⁽¹⁾。自殺を防ぐためには、自殺に至る背景や要因を整理し、そうした背景をもつ個人の困難を一つずつ取り除いていくことが必要である。自殺リスクに関連する要因の一つに、人々が自殺に抱く認識とそれを支える文化的背景が挙げられる。

日本は歴史的に見ると自殺に対して許容的な文化をもつことが指摘されている。Durkheimは『自殺論』のなかで献身や自己犠牲が強調される伝統的・道徳構造を持つ社会集団本位的自殺を自殺の一つの類型として示し、そうした自殺が観察される文化の例として日本を挙げている⁽²⁾。集団本位的自殺の例としてしばしば挙げられるのが切腹や引責自殺である。島藪⁽³⁾は、切腹や男女心中を描いた江戸時代以前からの物語や本が、日本社会で自殺に許容的な文化通念を形成するのに貢献したことを指摘している。また、自殺の許容的態度において心中や切腹と言った形で文学作品などで取り上げられる「美しい自殺」の表現との関連が指摘されている⁽⁴⁾。こうした自殺の美学的側面を強調する物語に親しみをもつ日本は、歴史的に見ると他国と比べてもユニークな自殺の文化、つまり、自殺への許容的な文化をもつといえる。そして、こうした文化的背景が何らかのかたちで日本の高い自殺率と関連している可能性がある。

一方で、現代において日本人を対象に自殺への許容性を調査した場合、他国と比べ必ずしも高い許容性を示すわけではないという結果が示されている。世界価値調査 (World Value Survey) は、世界の25カ国・地域の人々を対象に、政治観、教育観など広範な意識調査を行ったものであり、そのなかに様々な事象への許容度として、自殺が認められるかどうかを尋ねた項目がある。日本では、自殺を「全く認められないNever justifiable」と回答したものの割合は、2005年の調査時点で46% (2010年では51%) となっており、ドイツやフランスと比べると15%以上高く、アメリカや韓国と同程度であった⁽⁵⁾。この結果は日本人の半数程度は自殺が許されないものであると認識していることを示している。

死の美学的側面を強調する物語が見られるような自殺への許容的な文化的背景をもちながら、現代においては自殺を許されないものとする考え方が一般的に広まっている日本社会は、死に対する独自の価値観を形成していると考えられる。日本の自殺問題を考えるうえでは、こうした価値観を踏まえたうえで、自殺予防の施策を講じていく必要

があるだろう。

2007年に閣議決定された自殺総合対策大綱では、「自殺は追い込まれた末の死」であり、「自殺は個人の自由な意思や選択の結果ではなく、様々な要因が複雑に関係して心理的に追い込まれた末の死」であることが示された。このことは自殺を個人の問題として捉えるのではなく、社会全体の問題として捉えることの必要性を強調したものである。

自殺を個人の問題ではなく社会的な問題と捉える認識が強ければ、社会への働きかけや取り組みへの積極的な態度へとつながり、それによって自殺対策が推進される。もし、自殺が追い込まれた末の死としてではなく、何らかの主義主張を表すため、信義に基づくもの、といった利他的な行為もしくは個人にとっての「良い」行いとして捉えたならば、自殺が当事者にとって危機的な状況によるものであったことを見過ごしてしまうだろう。たとえば、現代日本社会の自殺が「切腹」のような本人の覚悟の上で自殺が行われるという認識があった場合、自殺予防の必要性の認識を弱めてしまう可能性がある。こうした自殺に関する認識の実態を把握したうえで、社会的な困難につながりうる偏見については是正を求めていく必要がある。

一方で、自殺といった「死」に関連する問題を、研究・調査において取り扱う際には、回答者に「社会的な望ましさ」が意識されやすいため、質問紙調査や面接調査を用いた場合、実態を反映したデータが収集しにくいと考えられる。ゆえに、死や自殺に関する人々の認識を適切に検討するためには、回答者の意識的な対処を踏まえた測定方法を用いる必要がある。つまり、自殺に対して表面的には許容できないとする態度を示す一方で、潜在的な態度においては、自殺への許容的な態度やポジティブな評価が内在されている可能性がある。ゆえに、自殺問題への理解を深め、自殺対策を積極的に進めるためには、自殺への潜在的な態度も含めて自殺への認識を検討する必要がある。

そこで本研究では、自殺に関する考えの実態を把握し、今後の自殺対策活動に活かしていくことを目的として、潜在的態度を測定する実験的手法であるIAT (Implicit Association Test) を用い、自殺に関する大学生の認識について検討を行うこととする。

2 方法

2. 1 手続き

参加者は大学生・大学院生44名（男性20名、女性24名）、平均年齢は23.6歳（SD=1.6）であった。実験参加者は、実験に関する説明を受け、同意したうえで個別に実験に参加した。参加者は、はじめに自殺に対する潜在的態度を測定するImplicit Association Test (IAT)⁶⁾を行った。その後、顕在的態度を測定する質問紙に回答した。実験ならびに質問紙調査の後に、参加者はディブリーフィングを受け、実験終了とした。

2. 2 調査期間

2017年10月中旬から11月上旬までに調査を実施した。

2. 3 測定

(1) 潜在的態度の測定 (IAT)

本研究では、潜在的態度の測定において広く使用されているIAT⁶⁾を用いた。IATは、単語の分類を行うことによって、ターゲットと属性の連合強度を測定し、個人がターゲットに対してもつ潜在的な態度を捉えようとするものである。実験参加者は、コンピューター上の中央に提示された刺激（単語）を、左右上部に提示されたカテゴリのいずれか当てはまる方に分類するよう教示された。刺激は、必ずいずれかのカテゴリに当てはまるものが用意されており、左側に表示されたカテゴリに当てはまる場合はキーボードの“E”キーを押し、右側に表示されたカテゴリに当てはまる場合はキーボードの“I”キーを押すよう指示された。正解の場合は次の試行へ移り、不正解の場合は、他のキーを押すと次の試行へ移る設定であった。

IATの実施には、NEC社製ラップトップ型PC、12インチ画面を使用し、ソフトウェアにはMillisecond社Inquisit 5.0を使用した。

課題は7ブロックで構成され、1、2、5ブロックは練習とし、3、4、6、7ブロックがテストであった。それぞれの試行で異なるカテゴリが提示された。

本研究では、自殺への潜在的態度を測定するため、病死と不慮の事故死を自殺の対となるカテゴリとして設定した。本実験におけるIAT実施に用いたカテゴリを表1に示した。各カテゴリに含まれる刺激語の選定のため、あらかじめ本調査とは異なる研究協力者（n=32）を対象に、「自殺」「不慮の事故死」「病死」に対する自由連想法による

記述をもとめた。また、良い・悪いに関する刺激語については、Greenwald et alの研究で用いられた表現⁽⁶⁾ならびに、美学的な価値観も含めた自殺への認識を測定する尺度であるSOSS尺度 (Stigma of Suicide Scale)⁽⁷⁾の日本語版項目等⁽⁸⁾⁻⁽¹⁰⁾を参考にしうえて、一部新たな表現を追加した。これらの検討を経て作成したカテゴリと刺激語を用いて予備実験を行い (n=4)、対象者が理解困難と報告した表現や、実験試行において判断時間が過度に長いものとなった表現を修正し、本実験に用いた。

本実験の練習試行では、参加者は、「自殺—病死」もしくは「自殺—不慮の事故死」のターゲットカテゴリと、「良い—悪い」の態度カテゴリに刺激を分類することを求められた。テスト (本実験) では、参加者は、組み合わせられたカテゴリ (例えば、画面左上部に「『自殺』または『良い』」が提示され、画面右上部に「『病死』または『悪い』」が提示される) に対して刺激を分類するよう求められた。カテゴリの組み合わせは5、6ブロックのテストの際に3、4ブロックの逆の組み合わせ (例えば、画面左上部に「病死」または「良い」が提示され、画面右上部に「『自殺』または『悪い』」が提示される) にした。

参加者は、中央に提示された刺激をできるだけ早く、正確に分類するよう求められ、テストにおいて合計120試行の分類作業を行った。参加者は、「自殺—不慮の事故死」ならびに「自殺—病死」と、一般的評価「良い—悪い」もしくは美学的評価「良い—悪い」の組み合わせからなるテストを続けて行い、それぞれのテストの順序は参加者ごとにカウンターバランスをとった。また、各ブロック内での刺激語の提示順序は、参加者ごとにランダムであった。

IATのテストにおける反応遅延測度はコンピューター上に記録され、標準的なIAT数値化のアルゴリズム⁽¹¹⁾を用いてIAT効果量 (d) を算出した。IAT効果量の値が大きいほど、「自殺」と「良い」の連合が、「病気」もしくは「不慮の事故死」と「良い」の連合よりも強いことを意味する。すなわちIAT効果量の値が正の方向に大きいほど、「病死」もしくは「不慮の事故死」よりも「自殺」に対してポジティブな評価を表す。

(2) 顕在的態度

a. 自殺への許容的な態度に関する測定項目

先行研究⁽¹²⁾をもとに、自殺への許容的な態度に関する項目 (5項目) に5件法 (1:非常に賛成できない, 2:賛成できない, 3:どちらでもない, 4:賛成できる, 5:非常に賛成できる) で回答を求めた。具体的な項目は「人には自ら死を選ぶ権利がある」「他人に危害さえ加えなければ、人は自分の人生を終わらせてもいい」「自殺をしようとするのは、その人の問題なので止めるべきではない」「正義のためなら、自殺は許される」「他人に迷惑をかけないのであれば自殺をしてもかまわない」であった。

b. 自殺へのイメージに関する測定項目

自殺の顕在的評価として、自殺に対する良い・悪いについてのイメージを尋ねる問いを質問紙に設けた。設問は「自殺は良いと思いますか、それとも悪いと思いますか。」という教示に対して、7件法で回答を求めた。回答選択肢は、両端から「非常に」「とても」「やや」と表示し、中心を「どちらでもない」とした。

2. 4 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、予め上越教育大学研究倫理委員会の承認を得た (承認番号: 2017-6)。また、調査協力者に対し、研究趣旨や方法などについて書面ならびに口頭で十分な説明を行い、文書にて同意を得たうえで調査を実施した。調査実施においては、回答者が特定できないよう調査は全て無記名で行った。

表1 IATカテゴリと刺激語

カテゴリ	項目 (刺激語)
一般的評価IAT	
良い	愛情, 喜び, 安らぎ, 抱擁, 幸運
悪い	憎しみ, 悲嘆, 苦しみ, 暴行, 不運
美学的評価IAT	
良い	美しい, 大義がある, 気高い, 道徳的に正しい, 熟慮された
悪い	醜い, 自分勝手な, 恥ずかしい, 不道徳的な, 浅はかな
自殺	首吊りによる死亡, 飛び降りによる死亡, 服毒による死亡, リストカットによる死亡, 練炭による死亡
病死	がんによる死亡, 心臓病による死亡, 肺炎による死亡, 高血圧による死亡, 脳梗塞による死亡
不慮の事故死	交通事故による死亡, 転倒・転落による死亡, 誤嚥による死亡, 火災による死亡, 溺死

3 結果

IATにおいてエラー率が30%以上であった者1名を分析から除外し、最終的に分析対象者は43名（男性19名、女性24名）、平均年齢23.6歳（SD=1.6）となった。

3.1 潜在測定値間の関連性

「自殺—病死」と「自殺—不慮の事故死」の二つの条件間での共通性を検討するため、IAT効果量を0.15を閾値として分析したところ、一般的評価IATにおいて不慮の事故死よりも自殺に選好を示したのは48.8%（21/43）、病死よりも自殺に選好を示したのは41.9%（18/43）であった。美学的評価IATにおいては、不慮の事故死よりも自殺に選好を示したのは18.6%（8/43）、病死よりも自殺に選好を示したのは60.5%（26/43）であった。両条件で一貫して自殺に対する選好を示したものは、中程度以上の選好と弱程度以上の選好を合わせると、一般的評価IATでは32.6%（14/43名）、美学的評価IATでは9.3%（4/43名）であった（表2、表3）。また、一般的評価IATにおいて病死よりも自殺に選好を示すと同時に、自殺よりも不慮の事故死に選好を示したものはみられなかった（表2）。一方で、美学的評価IATにおいては、病死よりも自殺に選好を示すと同時に、自殺よりも不慮の事故死に選好を示すものが32.6%（14/43名）みられた（表3）。

表2 一般的評価IATのIATカテゴリごとの効果量のクロス集計表（数値は人数）

	不慮の事故死よりも自殺 に中程度以上の選好	不慮の事故死よりも 自殺に弱程度の選好	選好なし	自殺よりも不慮の事故 死に弱程度の選好	自殺よりも不慮の事故 死に中程度以上の選好
病死よりも自殺に中程度以上の選好 ($d > 0.35$)	7	1	2	0	0
病死よりも自殺に弱程度の選好 ($0.35 \leq d < 0.15$)	3	3	2	0	0
選好なし ($-0.15 \leq d \leq 0.15$)	0	6	6	1	0
自殺よりも病死に弱程度の選好 ($-0.15 < d \leq -0.35$)	0	1	4	1	1
自殺よりも病死に中程度以上の選好 ($d < -0.35$)	0	0	3	0	2

表3 美学的評価IATのIATカテゴリごとの効果量のクロス集計表（度数は人数）

	不慮の事故死よりも自殺 に中程度以上の選好	不慮の事故死よりも 自殺に弱程度の選好	選好なし	自殺よりも不慮の事故 死に弱程度の選好	自殺よりも不慮の事故 死に中程度以上の選好
病死よりも自殺に中程度以上の選好 ($d > 0.35$)	1	0	4	2	6
病死よりも自殺に弱程度の選好 ($0.35 \leq d < 0.15$)	2	1	4	2	4
選好なし ($-0.15 \leq d \leq 0.15$)	0	2	6	3	0
自殺よりも病死に弱程度の選好 ($-0.15 < d \leq -0.35$)	1	0	1	1	0
自殺よりも病死に中程度以上の選好 ($d < -0.35$)	0	1	1	0	1

3.2 潜在測定と顕在測定の関連性

自殺への許容性に関わる質問項目（計5項目）について因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。その結果、1つの因子が抽出され、各項目の因子負荷量は、「人には自ら死を選ぶ権利がある=0.597」「他人に危害さえ加えなければ、人は自分の人生を終わらせてもいい=0.737」「自殺をしようとするのは、その人の問題なので止めるべきではない=0.825」「正義のためなら、自殺は許される=0.699」「他人に迷惑をかけないのであれば自殺をしてもかまわない=0.712」であった。この因子を「自殺への許容性」と命名し、5項目の合計得点を自殺への許容性得点として分析に用いた（Cronbach's $\alpha = 0.826$ ）。「自殺への許容性」について対象者全体の平均値は11.91（SD=3.70）であった。

顕在的評価としての質問紙調査における自殺へのイメージの回答結果として、自殺を「非常に悪い」と回答した者は29.5%（13/43名）、「とても悪い」は27.9%（12/43名）、「やや悪い」は11.6%（5/43名）であり、「どちらでもない」が23.3%（10/43名）、「やや良い」が6.9%（3/43名）であった（平均値=-1.51, SD=1.33）。「非常に良い」

「とても良い」と回答したものはなかった。

次に、自殺に対する潜在的評価と顕在的評価の関係性を検討するため、相関分析を行った(表4)。潜在的評価の指標としては、各IAT条件で測定されたIAT効果量(d)を用い、顕在的評価の指標としては、自殺への許容性得点と、自殺へのイメージとして「良い—悪い」(7件法)の回答結果を用いた。自殺に対する潜在的評価については、いずれの条件においても顕在的評価との相関関係は見られなかった。IAT条件による潜在的評価間の相関関係においては、「自殺—不慮の事故死」では、一般的IATと美学的IATの評価において強い相関がみられ($r=0.75, p<.01$)、「自殺—病死」でも同様に中程度の相関がみられた($r=0.45, p<.01$)。顕在的評価では、自殺への「良い」イメージと許容性において中程度の相関がみられた($r=0.60, p<.01$)。

表4 自殺に対する潜在的・顕在的評価の相関係数

	自殺—不慮の事故死 (美学的IAT)	自殺—病死 (一般的IAT)	自殺—病死 (美学的IAT)	自殺への 「良い」イメージ	自殺への 許容性
自殺—不慮の事故死 (一般的IAT)	0.75 **	0.28 †	0.36 *	-0.13	0.13
自殺—不慮の事故死 (美学的IAT)		0.22	0.25	-0.03	0.20
自殺—病死 (一般的IAT)			0.45 **	0.02	0.20
自殺—病死 (美学的IAT)				-0.09	-0.14
自殺への「良い」イメージ (質問紙調査)					0.60 **

n=43, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

自殺と他の死(病死, 不慮の事故死)の比較による自殺への潜在的評価と、自殺に対するイメージとして「良い—悪い」を質問紙調査による調査結果(顕在測定値)の関連性を検討するため、散布図を描いた(図1~図4)。

図1~図4では、縦軸に潜在的評価、横軸に質問紙調査結果(顕在測定値)を示し、中央横線より上部にプロットされた点は、IATをもとに自殺に対して潜在的に「良い」評価を示したものであり、中央縦線より左側にプロットされた点は、質問紙調査をもとに自殺に対して意識的に(顕在的に)「悪い」評定をしたものである。つまり、図中の第2象限(左上の領域)にプロットされた点は、意識的に(顕在的に)は、自殺に対してネガティブなイメージを報告している一方で、不慮の事故死や病死と比べた際に自殺を「良い」とする潜在的な意識をもっていたものと考えられる。また、図中の第4象限(左下の領域)にプロットされた点は、顕在的指標と潜在的指標とともに「悪い」という評価を示したものであり、両測定において一致した評定を示した対象者である。なお、図1~図4にプロットされた点の種類は身近な人の死の経験有無とその種別を表している。各図中の「身近な人の不慮の事故死」を経験した3名のうち、2名は「身近な人の病死」も経験しており、「身近な人の自殺」を経験したものはいずれも「身近な人の病死」も経験していた。

まず、質問紙調査で測定された顕在的評価の結果を再確認する。顕在的評価において「非常に」「とても」「やや」の評定をまとめた場合、「自殺」を「悪い」と回答したものは30名、「どちらでもない」が10名、「自殺」を「良い」と評価したものは3名であった。「自殺」を「良い」と評価した3名はいずれも近親者の「身近な病死」を体験したものであった。

一般的評価IATにおいて「自殺—病死」の結果(図1)では、14名が第2象限にプロットされ、一方で、第3象限にプロットされた対象者は15名であった。「自殺—不慮の事故死」の結果(図2)では、25名が第2象限にプロットされ第3象限にプロットされた対象者は5名であった。美学的評価IATにおいて「自殺—病死」の結果(図3)では、13名が第2象限にプロットされ、一方で、第3象限にプロットされた対象者は17名であった。「自殺—不慮の事故死」の結果(図4)では、19名が第2象限にプロットされ、第3象限にプロットされた対象者は11名であった。一般的評価IAT、美学的評価IATともに、「自殺」を「病死」と対置した条件では、潜在的評価と顕在的評価が一致するものとそうでないものがほぼ同数程度であったが、「不慮の事故死」と対置した条件では、潜在的評価と顕在的評価が一致しない対象者の方が多いという結果であった。

さらに、身近な人の死の経験有無とその種別による影響を検討した。まず、身近な人の死を経験しているグループとそうでないグループとで、潜在的評価と顕在的評価の各変数の平均値について t 検定を行ったところ、いずれにおいても有意差はみられなかった。また、身近な人の死を経験したのものについてその死の種別ごとに同様に各変数について分散分析を行った結果、いずれも有意差はみられなかった。身近な人の死の経験有無とその種別による影響は特にみられないという結果であった。少数サンプルであるが、「身近な人の自殺」を経験した対象者(n=2)については一般的IATならびに美学的IATのいずれの条件において病死もしくは不慮の事故死の方を「良い」とする結果であり、「身近な人の自殺」を経験した対象者については「自殺」への選好が見られないという傾向が示された。

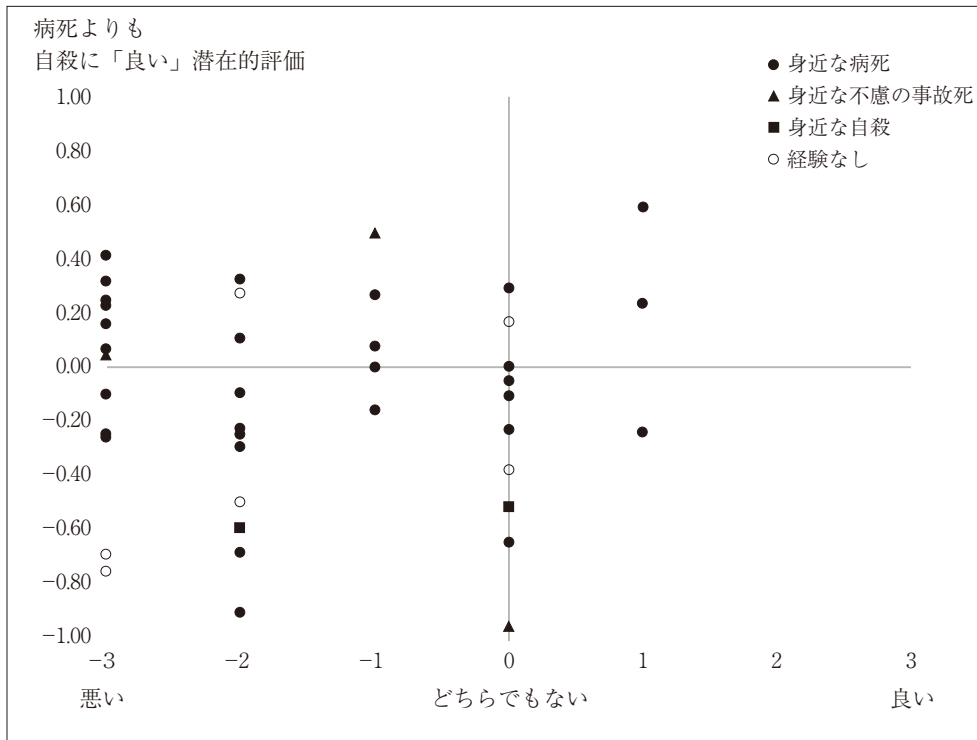


図1 一般的評価IAT「自殺—病死」におけるIAT効果量と「良い—悪い」質問紙評定の散布図

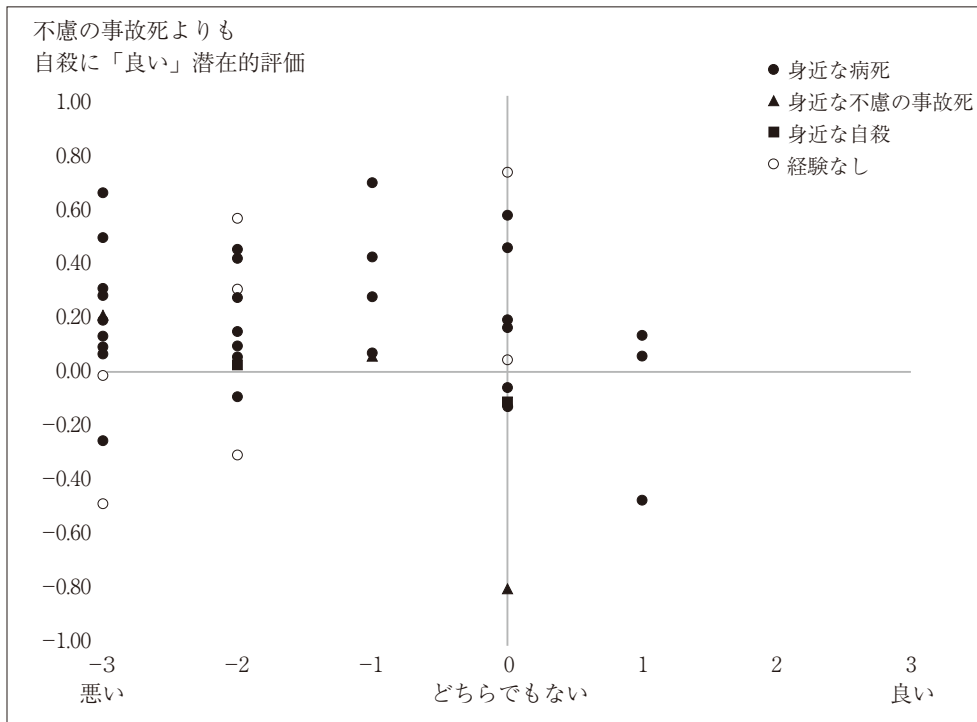


図2 一般的評価IAT「自殺—事故死」におけるIAT効果量と質問紙評定「良い—悪い」の散布図

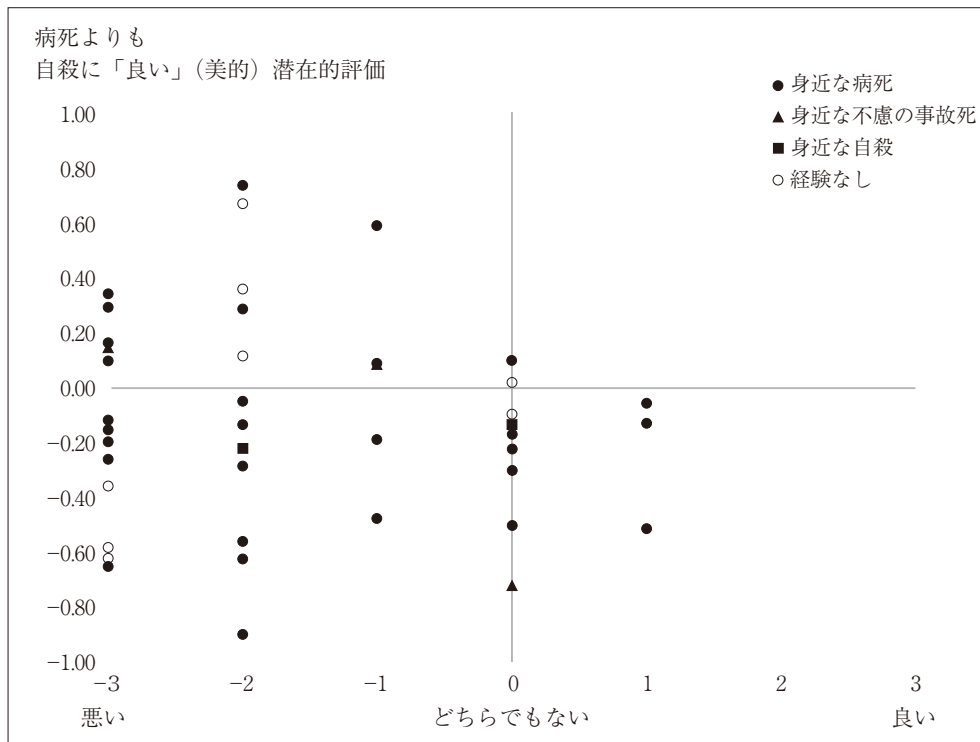


図3 美学的評価IAT「自殺—病死」におけるIAT効果量と質問紙評定「良い—悪い」の散布図

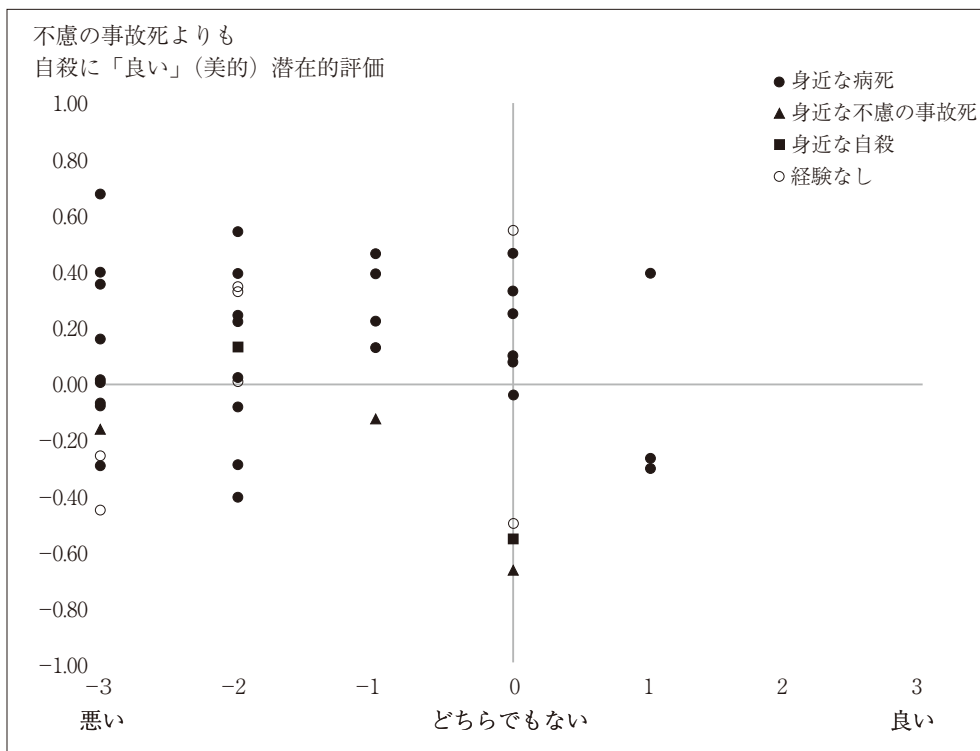


図4 美学的評価IAT「自殺—事故死」におけるIAT効果量と質問紙評定「良い—悪い」の散布図

4 考察

本研究は、自殺に対するイメージについてIATによる潜在的態度の測定により検討を行った。結果より、質問紙調査によって顕在的評価を行った場合は、大多数の調査対象者が自殺に対して「悪い」イメージを報告したが、IATによる潜在的評価においては自殺を「良い」と評価する対象者が一定数存在することが示された。

また、潜在的評価においては、一般的な意味での「良い」という評価と、美学的な側面に焦点をあてた「良い」という評価とで異なる評価をする対象者がみられた。このことは、自殺に関する「良い」もしくは「悪い」というイメージが複数の評価次元で構成されていることを示しているといえる。

質問紙の回答からは本研究の調査対象者のなかで身近な人物の自殺を経験したものはごく少数であった。ゆえに本研究結果は、自死遺族の抱える悲嘆や遺されたものの苦しみにについての知識や経験のない人々のもつ自殺やそれ以外の死についてのイメージが反映されたものだと考えられる。それゆえ、実体験の伴わないイメージによって自殺を他の死因と比べて「良い」ものと捉える傾向が生じている可能性がある。

本研究結果を解釈するうえでは、実体験の伴わない自殺のイメージがどのように構成されているのかを理解することが必要であろう。その一つには、自殺は、病死や不慮の事故死と比べて、本人の意思に基づく死であると認識されている可能性がある。病死や不慮の事故死は偶発的な死であり、本人の意思に関係なく生じる。その一方で、自殺が本人の積極的な意思に基づくものであったと捉えたならば、本来コントロールすることのできない死という現象に対して、自ら自殺という手段を採ることができるという点において積極的な価値が見出される。こうした理解はMaurice Pinguetが著書『自死の日本史』⁽¹³⁾のなかで、日本人が自殺に様々な意味や機能を見出し、生命の自己決定権の行使として自殺があったと指摘する歴史的経緯とも関連付けられるかもしれない。自殺が意思に基づくものであるがゆえに意味のある死として認識され、そのことが他の原因による死よりも「良い」ものとして認識される傾向があると考えられる。一方で、このような自殺へのポジティブな認識は現代の日本社会においては表立って語りにくいものであり、そのことが質問紙測定による顕在的指標において「自殺」へのネガティブな評価として現れたと理解できる。

以上の解釈は推論の域をでないものであり、今後の検証を要するものである。しかし、自殺が自分の意志でコントロールされたものであるという認識は、自殺が「追い込まれた末の死」であるという自殺対策の推進原理に相反するものであり、より適切な認識や理解へと改める必要がある。こうした認識の実態を改めて検証するとともに、このような認識が潜在的に広く存在するものであったならば、日本における自殺予防の推進のために是正を進めていく必要があるだろう。

また、本研究において、自殺を「良い」と捉える意識については顕在的指標と潜在的指標とで相関関係はみられなかった。このことは、質問紙調査への回答のように、自殺に関する考えを外在化する際には、潜在的態度が反映されにくいという仮説を支持するものであったと考えられる。そのため、自殺予防として自殺への偏見解消を目指すうえで、偏見を是正するための取り組みの効果を測るうえでは、自己報告による態度変容の確認だけでなく、潜在的な態度も含めて検証が必要かもしれない。ただし、必ずしも潜在的な態度の変容までを目指すことが必要とは限らない。自分のなかの差別的な意識や偏見の程度に気づくことが、偏見の低減に貢献することが示唆されており⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾、知らず知らずのうちに自らが抱えていた考え方を振り返る契機として潜在的態度の測定とフィードバックが有用性をもつといえる。

なお、本研究で自殺に対する顕在的指標と潜在的指標に相関が見られなかった点については測定方法に基づく誤謬である可能性も否定できない。顕在的測度と潜在的測度の相関が低いことは、両者が測定している概念の側面が異なることを示唆するものであり、潜在的測度の妥当性を否定するものではないとの指摘⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾はあるが、本調査結果がIATという測定方法に基づくアーティファクトである可能性を含めて、今後の検討によって再現性を慎重に確認しなければならないだろう。

引用文献

- (1) 厚生労働省. (2017). 自殺対策白書. (<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/17/index.html>) (最終アクセス2018年2月14日22時22分).
- (2) Durkheim, É. (1980). *自殺論* (宮島 喬, 訳). 東京: 中公文庫. (Durkheim, É. (1897). *Le Suicide: Étude de Sociologie*; Paris: Félix Alcan.)
- (3) 島蘭 進. (2011). 宗教や社会文化的通念と自殺の関係. 張 賢徳(編), *専門医のための精神科臨床リユミエール29 自殺予*

防の基本戦略, 198-203. 東京: 中山書店.

- (4) 布施豊正. (1985). *自殺と文化*. 東京: 新潮選書.
- (5) 電通総研日本リサーチセンター(編). (2008). *世界主要国 価値観データブック*. 東京: 同友館.
- (6) Greenwald, A. G., Mcghee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*(6), 1464-1480.
- (7) Batterham, P. J., Calear, A. L., & Christensen, H. (2013). The Stigma of Suicide Scale. Psychometric properties and correlates of the stigma of suicide. *Crisis*, *34*(1), 13-21. doi: 10.1027/0227-5910/a000156.
- (8) Kawamoto, S., Kawashima, D., Shiraga, K., & Kawano, K. (2017). Development of the Japanese version of the stigma of suicide scale. The 29th World Congress of the International Association for Suicide Prevention (IASP).
- (9) 川島大輔・森下雅子・川野健治. (2014). 自殺の美的表現へのナラティブ分析: 映画『ラストサムライ』を用いた文化的対話 日本心理学会第78回大会発表論文集.
- (10) Kawano, K., Kawashima, D., Kawamoto, S., & Shiraga, K. (2017). Suicide beautification in Japan. Proceedings of the 29th World Congress of the International Association for Suicide Prevention.
- (11) Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and Using the Implicit Association Test: I. An Improved Scoring Algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 197-216.
- (12) Kawano, K., Kawashima, D., & Shojima, S. (2010). Community Residents' attitude to suicide and suicide prevention in Japan. The 21st international biennial meetings of the International Society for the Study of Behavioural Development.
- (13) Pinguet, M. (1988). *自死の日本史* (竹内信夫, 訳). 東京: 筑摩書房. (Pinguet, M. (1984). *La mort volontaire au Japon*. Paris: Gallimard.)
- (14) Monteith, M. J. (1993). Self-regulation of prejudiced responses: Implications for progress in prejudice-reduction efforts. *Journal of Personality and Social Psychology*, *65*, 469-485.
- (15) Monteith, M. J., Devine, P. G., & Zuwerink, J. R. (1993). Self-directed versus other-directed affect as a consequence of prejudice-related discrepancies. *Journal of Personality and Social Psychology*, *64*, 198-210.
- (16) 藤井勉・澤海崇文・相川 充. (2015). 顕在的・潜在的シャイネスと心理的適応との関連: IATを用いて. *感情心理学研究*, *22*(3), 128-134.
- (17) 潮村公弘. (2008). 潜在的自己意識の測定とその有効性. 下斗米 淳(編), *自己心理学6 社会心理学へのアプローチ*, 48-62. 東京: 金子書房.

Implicit Attitude Toward Suicide: Comparison of Death from Disease or Accident as Measured by the IAT.

Keisuke SHIRAGA * · Daisuke KAWASHIMA ** · Shizuka KAWAMOTO *** · Kenji KAWANO ****

ABSTRACT

To promote suicide prevention, it is necessary to investigate people's perception of suicide. However, it is difficult to obtain honest responses from respondents about delicate issues such as suicide. Therefore, it is necessary to use an appropriate measurement method to collect reliable data on people's implicit understanding of death and suicide. In this study, 44 participants completed the implicit association test (IAT) for measuring implicit suicide attitude and the self-report questionnaire for measuring explicit suicide attitude. Consequently, in the evaluation of the explicit questionnaire survey, 69.8% of the participants reported "bad" images against suicide. Conversely, participants ranging from 18.6% to 60.5% evaluated suicide as being "good" in the evaluation of IAT for each condition. Moreover, in the implicit evaluation, there were participants who evaluated differently between the "good" evaluation of the general meaning and the "good" evaluation focusing on the aesthetic aspect.